

一 般 質 問

Q 民間出身町長として予算編成の骨格となる指針は

東海林 孝一郎

一、先般の臨時会において所信表明を行い、追って初の新年度予算編成となるが、民間からの町長として発想転換のもと、骨格となる指針を伺いたい。

二、どこの町村でも過疎化、少子化、高齢化という言葉は流行語のように使われている。高齢化については阻止できかねるが、過疎化、少子化については何らかの対策を講ずれば緩和できると思われる。その策の一端を伺いたい。

A 目配り、気配り、思いやりの精神を持って
施策の充実を図る

町長 関 次雄

一、これまで進めてきた施策で必要なものは継続しながらも鬼鹿地区のこども園をはじめ、高校生以下のインフルエンザワクチン接種など新しい事業を取り入れながら、各分野で目配り、気配り、思いやりの精神を持って施策の充実を順次推進する。経常経費の削減に努めながら投資的事業では優先順位を見極め、産業振興に寄与する事業を精査して編成したい。

二、いずれの対策についても特効薬は難しいと考えている。生活するためにはまず経済基盤、少子化対策の充実が必要であり、その結果として過疎化の抑制に繋がるものと考えている。
住宅不足の解消についてはPFI方式も含め、必要に応じた建設提供が人口流出防止策に繋がることも考慮して取り組んでいきたい。

Q 「ふれあいの森」今後の方向性は

浅田 和夫

一、国有林の伐採跡地の有効活用について、昭和61年に造林し25年程度経過したが管理状況と育成状況及び今後の方向性について伺う。また川上地区については相当な被害があったようであるがこのまま間伐等で終了するのか、あるいは補植的なことが可能であるのか伺う。

A 除間伐等が必要な時期に来ており、森林組合と
十分協議のうえ取り進めたい

町長 関 次雄

一、ふれあいの森は、都市と農山村との連携交流による国有林活用方法として実施され、達布下記念別（S60）、川上地区（S61）の約133畝に姉妹都市である小平市及び小平市民の方々にオーナーとする分収林事業を開始し、その後10年間下草刈りを実施した。下記念別においては平成14年に除間伐を行い、順調に生育が進んでいるが、川上地区については野鼠の被害、傾斜地のなだれ被害などにより、植林数の半分程度が残存している状況である。植林当初は一時補植も行っているが、25年経過していることから除間伐が必要な時期に来ており、現状の育成状況を勘案し森林組合と十分協議のうえ取り進めたい。